

家持の聞いた〈音〉

遙かに江を沂る船人の唱を聞ける

歌一首

朝床に 聞けば遙けし

射水川 朝漕ぎしつづ 歌ふ船人

(巻十九―四一五〇)

昨年、はじめて越中の地を訪れた。

大伴家持の足跡をたどる旅であった。

『万葉集』は、閏歴の不明な歌人が多い。大伴家持はその詳細がある程度わかっている、数少ない歌人である。

家持は天平十八(七四六)年に越中国守として赴任し、大伴池主という部下と出会う。池主との歌や詩文のやりとりで、家持は漢文学の世界に目覚めていった。池主と交わした「布勢の海水に遊覧せる賦」(巻十七)は、心の

通つた仲間と、美しい布勢の海水で楽しく遊ぶことの喜びが詠まれている。布勢の海水は現在の十二町瀧と伝えられているが、家持たちが船遊びをしたという海水の面影は、今はない。しかし、「布勢の海水に遊覧せる賦」を読むことで、かつての海水の風景を呼び起こすことができる。それが、文学の持つ魅力の一つであり、その土地が持つ力であろうと思う。

この旅では、越中国庁跡や国守館跡にも訪れた。国守館跡には、ぼつりと石碑が立っている。その石碑の裏に彫られているのが、冒頭の歌である。『万葉集』の配列から、この歌は天平勝宝二(七五〇)年三月二日の詠と考えられる。静まりかえった、春の朝の澄んだ空気が思われる。

国守館跡は、射水川を眼下に臨む高台の地にある。現在は、川沿いに道路が通り、住宅が建ち並んで川瀬の音は聞こえない。この歌は、朝床の中で、聞こえてくる音だけを頼りに詠まれている。射水川の川音、リズム良く梶を漕ぐ音、そこに重なる船人の歌声。すべては家持の「遙けし」という、おぼろな風景の中に存在している。

大伴家持の生年には諸説あるが、現在は養老二(七一八)年説が有力とされている。大伴家持が誕生して、約一三〇〇年を迎えることになる。大和、越中を問わず、家持の見た景色をめぐってみる良い機会かもしれない。



裏に万葉歌が刻まれた石碑